

aboutは「について」か

平沢慎也

sh.hirasawa.el@gmail.com

キーワード: *about* 「について」 前置詞 話題・トピック 内容 名詞化

要旨

英語の前置詞*about*は〈思考・発話〉を表す語句とともに用いられることが多い (e.g. *think about ...*, *ideas about ...*, *talk about ...*, *the statement about ...*)。 *about*の補部名詞句の選定の仕方に関しては、(i) 〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉を補部名詞句に据える場合もあるが、(ii) 話し手が参照しているセンテンス形式の〈思考・発話〉とほぼ同じ内容を表すセンテンスを聞き手が頭の中で復元できるように、元のセンテンスの全体または重要な一部を名詞化したものを補部名詞句に据える場合もある。(ii)のとき、補部名詞句が結果的に〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉に対応する場合もあるが、他にも〈思考・発話〉の〈内容〉など様々な要素と対応しうる。たとえば、*Forget what I said about you being smart* 「あなたのこと賢いって言っちゃったけど、あれ、忘れて」における*you being smart* は、*You're smart*という〈発話〉そのものを名詞化したものであるから、対応しているのは〈発話〉の〈内容〉であって〈話題・トピック〉ではない。

日本語訳に関しては、補部名詞句が〈話題・トピック〉に対応するならば、堅い文体では「について」が、柔らかい文体では「の話を」や「のことを」などが妥当であるが、補部名詞句が〈話題・トピック〉に対応しない場合があることを踏まえると、万能の訳語は存在しないと考えるべきである。

1. はじめに

まず、以下の日本語文を英語に翻訳して見ていただきたい。(1a) は、主人公の信吾が、孫娘の里子の着物を買いに出かけ、帰宅した場面を描いたものである。(1b) に関しては、「環」は Tamaki と表記することにし、時制は過去時制を選択するものとする。(1c) については、「ふかえり」を Fuka-Eri と表記し、「戎野先生」を Professor Ebisuno と訳すものとする。

- (1) a. 信吾は里子のきものを買いに出たとは言わなかった。 (川端康成『山の音』)
- b. 環はいつもダイエットをしなくちゃと言っている。 (村上春樹『1Q84, Book 1』)
- c. ふかえりの両親が死んだという彼らの言い分を、戎野先生はそのまま受け入れたの
 ですね? (村上春樹『1Q84, Book 3』)

どのような翻訳をなさただろうか。これらの作品は既に翻訳が出版されており、その中で

(1) の該当箇所は (2) のように訳されている。これとご自分の英訳を比較されたい。

(2) a. Shingo said nothing **about** having gone out to buy her a kimono.

(Yasunari Kawabata, *The Sound of the Mountain*; 翻訳はEdward Seidensticker; 太字は筆者)

b. Tamaki always talked **about** going on a diet [...]

(Haruki Murakami, *1Q84*; 翻訳はJay Rubin; 太字は筆者)

c. Did Professor Ebisuno accept what they said **about** Fuka-Eri's parents being dead?

(Haruki Murakami, *1Q84*; 翻訳はPhilip Gabriel; 太字は筆者)

もちろん、これらが唯一絶対の翻訳であるということはない。他にいくらかでも訳し方はあるだろう。ここで問題にしたいのは、優れた訳ができたかどうかではなく、**about**が使えるという発想が思い浮かんだかどうか、比較考量した選択肢のなかに**about**を使った表現が含まれていたかどうか、ということである。読者が日本語を母語とする英語学習者の場合、おそらく答えはノーなのではないだろうか。さらに (2b) と (2c) にいたっては、プロの翻訳家による英訳を見てもなお「自然な英語なのか」「和文の意味と揃っているのか」といった疑問を抱く読者もいることと思う。なぜならこれらの英文は、**about**とよく結び付けられて教えられている「について」という訳語を使って捉え直すと、「環はいつもダイエットすることについて喋っている」、「ふかえりの両親が死んだことについて彼らが言っていることを、戎野先生はそのまま受け入れたのですね?」と言っていることになるからである。

やや乱暴なまとめ方であるが、結局のところ、一般的な日本語母語話者にとっては「…について」やそれに類する言葉が与えられていない状況で英語の**about**を使おうなどとは思ってもよらない、というのが実情ではないだろうか。本稿はこの問題について真剣に考えたい。つまり、前置詞**about**を「…について」（やそれに類する言葉）との対応を越えて理解し、英語母語話者が使っているのと概ね同じように使えるようになるためには、どのような知識を持っていなければならないのかを論じたい。

2. 前置詞**about**に関する従来の理解とその問題点

第2節では、前置詞**about**に関する従来の理解を確認し (2.1), それを抱える小さな問題を指摘し、その小さな問題を乗り越えるための微修正案を提示する (2.2)。そのうえで、もっと大きな問題として、従来の理解では（微修正を施してもなお）適切に捉えることができない実例が数多く存在することを指摘する (2.3)。

2.1. 前置詞**about**に関する従来の理解の確認

日本における英語学習者が一番はじめに習う前置詞**about**の意味は「…について」だろう。中級者の場合、**about**と似ていて少し異なる**on**と対比させる形で、次のように指導されるかもしれ

ない。以下は学習者用の優れた英文法書からの引用である。

- (3) 「～について」という場合、一般的には**about**を、学術論の表題など改まった場合には**on**を使うという傾向がある。

I'd like to talk to you **about** yesterday's test.

(昨日の試験についてお話したいのですが)

I wrote a term paper **on** channels of communication **on** the Internet.

(私はインターネットにおける情報伝達の経路について期末レポートを書いた)

(綿貫・ピーターセン2006: 318 ; 太字は原文)

日本語訳としては「…について」が最も一般的に受け入れられていると言ってよいだろう。このことは、『ウイズダム英和辞典』（第4版）や『ロングマン英和辞典』をはじめとした各社英和辞典の第一訳語（および太字などの強調が施されている訳語）を見ると分かる。

学術的な文献でも、英語のabout ...に対応する日本語訳として「…について」が認められている。日下部（1955: 20）はabout ...に「…について」の意味があることを認め、他の語との結合という観点から次のように述べている¹。

- (4) Concerning (について) の意味で広く次のような動詞、形容詞及びその他の語と結びつく。[...]

Speak, think, ask, dream, hear, know *about* / be sorry, pleased, perplexed *about* / give orders, instructions, information *about* / form plans, have doubts, feel sure *about*, etc.

(日下部1955: 20 ; 斜体は原文 ; 旧字体から新字体への変換は筆者)

また、以下にあるように、いま問題にしているabout ...を説明した英米の文献にtopicという語やsubjectという語が現れていることから、日本語の「…について」との対応がうかがえる²。

¹ 筆者が知る限り、「…について」の意味のabout ...と他の語の結合に関して最も詳細に書かれたものは小西（1976: 113-121）である。aboutでなければいけない場合、他の前置詞でなければいけない場合、aboutでも他の前置詞でもよい場合、など場合分けされ、この問題が9ページに渡って論じられている。

ただし、say, tell, talk, speakという4つの動詞とabout（および「…について」と似た意味を表しうる他のofなどの前置詞）の共起についてはBrorström（1963）が最も詳しい。20世紀、19世紀、17-18世紀、15-16世紀という4つの時代に書かれた小説や手紙などから実例を収集し、前置詞の頻度分布が[what ... 動詞 ... 前置詞]、[動詞 + {something, anything, nothing, etc.} + 前置詞] など構文環境ごとにどのように変化していったかを描き出した大作である。

² ここに挙げたもの以外には、Schibsbye（1969: 305）など。またPinker（2014）も（aboutの記述としてではないが）次のように述べていることからaboutは〈話題・トピック〉を導く語であると考えているようである。

- (i) A writer might think that it's unsubtle to announce the topic in so many words, as in "This paper is **about** hamsters."
(Pinker 2014: 146 ; 下線と太字は筆者)

書き手が「これはハムスターについての論文である」のように露骨にトピックを宣言するのは稚拙だと考えることもあるだろう。

なお、(5) のLandmark (ランドマーク) とは所謂「前置詞の目的語」(たとえばtalk about curry のcurry) のことである。

- (5) By a wide margin, the commonest meaning of *ABOUT* is something like ‘concerning/regarding’, in which case the Landmark fulfills the role of *topic*.

(Lindstromberg 2010: 141 ; 太字は筆者)

aboutの意味で群を抜いて一般的なのは「について、に関して」のようなもので、この場合にはランドマークが〈トピック〉の役目を果たすことになる³。

- (6) *About* and *on* can both indicate the **subject** of a communication or discussion.

(Leech and Svartvik 2002:128 ; 太字は筆者)

aboutとonはどちらもコミュニケーションや議論の話題を示すのに用いることができる。

以上をまとめると、次のようになる。なお、以下では簡略化のため思考、発話、知識、情報などのことを〈思考・発話〉と表記する。また、「aboutの補部名詞句」とは学校文法風に言い直せば「aboutの目的語」のことである。

- (7) 前置詞aboutに関する従来理解

前置詞aboutは、〈思考・発話〉を表す語句とともに用いて、それがどのような〈思考・発話〉であるのかを指定することができる。aboutの補部名詞句は〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉に対応する。このとき、日本語訳としては「…について」が妥当である。

これによって適切に捉えることができる実例をいくつか挙げておく。以下の例では「…について」という日本語訳が文脈上も文体上も自然なものとして機能する。

- (8) 小説における地の文の例

- a. Like most people, Quinn knew almost nothing **about** crime.

(Paul Auster, *City of Glass* ; 太字は筆者)

たいていの人がそうであるように、クインは犯罪というものについてほとんど何も知らなかった。

(柴田元幸 (訳) 『ガラスの街』 ; 下線は筆者)

- b. [...] despite everything I felt **about** Lindy Gardner, when I read this, I felt a tingle of excitement [...]

(Kazuo Ishiguro, “Nocturne” ; 太字は筆者)

これを読んだとき、リンディ・ガードナーについてのもろもろの思いは雲散霧消し、

³ 以下、特に断りのない限り、翻訳は本稿の筆者によるものである。

体内に興奮が湧き上がってきた。 (土屋政雄 (訳) 「夜想曲」 ; 下線は筆者)

(9) 学術文章の例

a. What does the concreteness of language say **about** human thought?

(Steven Pinker, *The Stuff of Thought* ; 太字は筆者)

では言語の具体性は、人間の思考についてどんなことを物語っているのか。

(幾島幸子・桜内篤子『思考する言語 (上) 』 ; 下線は筆者)

b. There is, I suspect, a widespread misconception **about** the scope of Cognitive Linguistics in general (and Cognitive Grammar in particular). This is that Cognitive Linguistics is concerned exclusively with semantic matters and with the meaning-bearing units of a language.

(John R. Taylor, *Cognitive Grammar* ; 太字は筆者)

どうやら多くの人が、認知言語学一般 (特に認知文法) の守備範囲についてある誤解をしているようである。それは、認知言語学は関心の対象を意味に関わる事柄や意味を担う言語単位に限定しているのだという誤解である。

2.2. 前置詞aboutに関する従来の理解が抱える小さな問題

第2.2節では、(7) に提示した従来の理解が抱えている小さな問題を指摘し、その問題を乗り越えるための微修正案を提示する。

その小さな問題とは、文体上の堅苦しきである。「…について」というのは、漢字が含まれていないためやや気が付きにくいけれども、日常会話では (特にくだけた会話や子どもの発話では) 用いられにくいものである。たとえば、(10) と (11) を見てみると、「について」が文の他の箇所と文体的に衝突しているように感じられる。

(10) ? 休日だっていうのに仕事についてしゃべんのマジでやめてくんない?

(11) ? ねえ、お母さん。お父さんから聞いたんだけど、僕のおねしょについてしずかちゃんに喋ったの?

これらの例を自然な日本語に直すにはいくつかの方法が考えられる。たとえば、「話」や「…のこと」といった表現を用いて次のように修正すると、完全に自然な日本語文になる。

(12) 休日だっていうのに仕事の話すんのマジでやめてくんない?

(13) ねえ、お母さん。お父さんから聞いたんだけど、僕のおねしょのこと、しずかちゃんに喋ったの?

一方、英語のaboutには堅苦しきが一切ない。俗っぽい文体の会話文でも、子どもの発話でも、ごく普通に用いられる。以下の例を見よう。

- (14) 父親から息子への発話。息子はミュージシャンとして生きていきたいと主張しているが、父親は害虫駆除の仕事を継いでほしいと考えている。

I guess I was a little rough on you. Look, I'm never going to be happy **about** this music thing, but I'm always going to be in your corner. I'm your old man.

(*Full House*, Season 2, Episode 3, "It's Not My Job")

ちょっときつく当たりすぎてしまったな。言っておくが、お前が音楽で食っていくとかいう話を俺が喜ぶ日は来ない。けどな、俺はいつだってお前の味方だ。なにせお前の親父なんだからな。

- (15) D.J. (推定12歳) とステファニー (推定7歳) は姉妹。ステファニーは枕元にお札が1枚置いてあったことに大喜びしている。

Stephanie: Whoa, baby!

D.J.: You're "whoa, baby"-ing **about** a dollar bill?

(*Full House*, Season 3, Episode 3, "Breaking Up is Hard to Do")

ステファニー: うおお、すごい!

D.J.: あんた、1ドル札で「うおお、すごい」ってなってんの?

(14) に関しては、(be) going toが[gəʊnə]と発音されていることと、music thingというぞんざいな言い回しが用いられていることの2点に注意されたい。これらは (14) がくだけた発話であることを示している⁴。(15) に関しては、まだティーン・エイジャーになっていない子ども同士の会話であることと、whoa, babyというステファニーの発話がそのまま動詞として利用されている(これは口語的な言語手段である) ことの2点に注意されたい。こうした発話でaboutが用いられても、文体上釣り合っていないという印象は与えない。これに対して、(14) と (15) の状況で「について」という日本語は文語的すぎて使いにくい。おそらく日本語には、不便なことに、〈話題・トピック〉を導くにあたって文語的な文体でも口語的な文体でも利用できる(英語のaboutのような) 万能の言語要素が存在しないのである。

こうした事情を考慮して、(7) に微修正を施すと次のようになるだろう。

- (16) 前置詞aboutに関する従来理解の微修正案

前置詞aboutは、〈思考・発話〉を表す語句とともに用いて、それがどのような〈思考・発話〉であるのかを指定することができる。aboutの補部名詞句は〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉に対応する。このとき、日本語訳としては、文語的な文体では「…について」が妥当であるが、口語文体では「…の話」や「…のこと」といった別の表現を利用する必要がある。

⁴ be going toの発音の崩れ方についての詳細は松坂 (1986: 142-144) を参照。[名詞+thing] という形をとった複合語については、Hohenhaus (2000), Salmon (2015), Li (2015: 211-213, 230-232) を参照。

2.3. 前置詞aboutに関する従来の理解が抱える大きな問題

2.3.1. 前置詞aboutが導く要素が〈話題・トピック〉ではなく〈内容〉であるケース

第2.3節では、aboutに関する従来の理解はたとえ (16) のように修正を施したとしても実際のaboutの使用を説明できない、ということを示したい。問題は (7) を (16) のように修正するにあたって修正をしなかった箇所にある。それは「aboutの補部名詞句は〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉に対応する」という部分である。

実は、aboutが〈思考・発話〉を表す語句とともに用いられているながらも、〈話題・トピック〉に相当しない名詞句が補部名詞句となることがあるのである。では何が補部名詞句になることがあるのかということ、その種類は実に様々で、一言では言い表すことができない（それでも一般化するとどうなるのかについては第3節を参照）⁵。第2.3.1節ではまず、補部名詞句が〈話題・トピック〉に対応していないことを納得しやすいであろうケースとして、〈思考・発話〉の〈内容そのもの（またはその要約）〉が導入されるケースを見てみたい。なお、以下では表記の簡略化のため、〈内容そのもの（またはその要約）〉と全く同じ意味で〈内容〉と記すことにする⁶。実例を見てみよう。

- (17) 一般市民のダーリンが警察から事情聴取を受けている場面。

Sergeant: You seem normal enough.

Darrin: Thank you, Sergeant.

Sergeant: By the way, what's in the bag?

Darrin: Just some things I bought. May I go now?

Sergeant: Just as soon as you tell me the contents of the bag.

Darrin: Does it matter?

Sergeant: It matters. What's in the bag?

Darrin: Two bat wings, half a pint of porpoise milk, four eye of newt.

Sergeant: You remember what I said **about** you seeming normal? Forget it.

(*Bewitched*, Season 2, Episode 6, "Take Two Aspirins and Half a Pint of Porpoise Milk")

巡査部長： あんた、わりと普通そうに見えますしねえ。

⁵ 現代英語のaboutの意味・用法が多様であるこの状態は、aboutが他の前置詞が表していた意味領域に侵入していくという通時的言語変化(Brorström: 1963)の結果として捉えるのが妥当であると思われる。Brorströmは様々な構文に関して事例研究を行っているが、その中から [tell (a person)+前置詞+it] という構文を例にとろう

(Brorström 1963: 32-34, 128)。20世紀の英語では、この構文にaboutを用いた [tell (a person)+about+it] で「itについて詳しく語る」(‘relate in detail’)の意味を表すのも「itという事実を伝える」(‘state a fact’)の意味を表すのも普通であるのに対して、19世紀の英語では [tell (a person)+about+it] が後者の意味で用いられることは稀で、後者の意味を伝達するのに頻繁に用いられている前置詞はofだったという ([tell (a person)+of+it])。これは、少なくとも [tell (a person)+前置詞+it] という構文環境において、aboutがofの意味領域に侵入していたことを示している。

⁶ このため、以下における「〈思考・発話〉の〈内容〉」は〈思考・発話〉を正確に反映したものではなく、〈思考・発話〉と趣旨が一致するもの程度にぼかされたものであることに注意されたい。第2.3.1節で扱う用法のaboutは話し言葉でよく用いられ、学術論文で用いられにくいという特徴を持つが、これは〈思考・発話〉の内容を不正確に導くという性質が学術論文というジャンルにそぐわないためかもしれない。

ダーリン： それはどうも。

巡査部長： ところでその袋には何が？

ダーリン： ちょっと買ったものがいくつか。もう帰ってかまいませんか？

巡査部長： 中身を教えていただければ、すぐに。

ダーリン： そんなに重要なことでしょうか？

巡査部長： そんなに重要なことですね。で、中身は？

ダーリン： コウモリの羽が2つ。ネズミイルカの乳、ハーフポイント。イモリの目玉4つ。

巡査部長： さっき、普通そうに見えるとか言ってしまったの覚えてますか？ あれ、なかったことにして下さい。

- (18) ベッドで仰向けになっているハリーのお腹とかけ布団の間に蛇がいると思われ、語り手が別の男性とともに慎重にかけ布団をめくっている場面。

The whole of Harry's chest was visible now, or rather the striped pyjama top which covered it, and then I saw the white cord of his pyjama trousers, neatly tied in a bow. A little farther and I saw a button, a mother-of-pearl button, and that was something I had never had on my pyjamas, a fly button, let alone a mother-of-pearl one. This Harry, I thought, he is very refined. It is odd how one sometimes has frivolous thoughts at exciting moments, and I distinctly remember thinking **about** Harry being very refined when I saw that button.

(Roald Dahl, "Poison")

ハリーの胸全体が見えるようになった。胸というか、胸を覆っているストライプのパジャマの上だが。次に、パジャマのズボンの白いひもが目に入った。きちんと蝶結びにされていた。もっと下に行くと、ボタンが見えた。真珠層のボタンだ。そんなものが自分のパジャマについていたことなんてない。そもそもパジャマのズボンにボタンがついていたこともないのだから、真珠層のなんでもってのほかだ。私は、このハリーって奴はまったくお上品だと思った。おかしなもので、人は時に、はらはらするような場面でもくだらないことを考えてしまうのだ。私は、あのボタンを見たときに、ハリーはまったくお上品だというようなことを思ったのをはっきり覚えている。

これらの例においてaboutの補部名詞句となっているyou seeming normal「あなたが普通に見えるということ」とHarry being very refined「ハリーがとても上品であること」は、what I saidとthinkingの〈話題・トピック〉であるとは言い難く、what I saidとthinkingの〈内容〉と考えるのが自然であるように思われる。実際、(17) では巡査部長がYou seem normal enoughと発言しており、(18) ではThis Harry, I thought, he is very refinedと語られている⁷。

⁷ (18) で〈内容〉を導くのにaboutを用いるのには、構造を単純化させたいという動機があるのかもしれない(慶應義塾大学の熊代敏行先生の指摘による)。同じくthinkingの内容を導くのに使えるthat節を用いると、I

次の例でも同様のことが言えるだろう。

- (19) And it also proves my theory **about** it being a professional killing.

(*Columbo*, Episode 3, “Murder by the Book”)

これで、今回の事件がプロの殺し屋による殺人だという私の仮説が正しいことも、証明されましたね。

- (20) He kidded **about** the accident being caused by a witch.

(*Bewitched*, Season 2, Episode 28, “Disappearing Samantha”)

この事故は魔女の仕業だなんて冗談を言っていたよ。

これらの例のaboutの補部名詞句it being a professional killing「it (=今回の事件) がプロの殺し屋による殺人だということ」とthe accident being caused by a witch「この事故が魔女の仕業であること」は、「仮説」と「冗談」の〈話題・トピック〉というより、〈内容〉と捉えるのが自然である。

上の(17)から(20)では、aboutの補部名詞句(you seeming normal, it being a professional killing)が[意味上の主語+動名詞]という構造をとり、what I saidとtheoryの〈内容〉と対応していた。これに対し、以下の2例では、aboutの補部名詞句に動名詞の意味上の主語に相当するものが含まれていない。

- (21) I made some lame remark **about** hanging in there and giving things a chance to develop, but he merely shook his head and smiled.

(Paul Auster, *Oracle Night* ; 太字は筆者)

まあひとつ頑張ってください、だんだん調子がついてきますよ、といったような当り障りのない科白をこっちが口にしても、また首を振って微笑むだけだった。

(柴田元幸 (訳) 『オラクル・ナイト』)

- (22) スペイン旅行に行こうとしている娘への父親の発話。キミーは娘の悪友。

I hope you take my advice **about** ditching Kimmy.

(*Full House*, Season 5, Episode 26, “Captain Video Part 2”)

キミーなんておいていきなさいっていう僕のアドバイスに従ってくれるよね。

これらの例では、hanging in there and giving things a chance to developとditching Kimmyの前に意味上の主語に相当するものが存在していないが、それでもremarkとadviceの〈内容〉に対応すると言える。なぜなら、(21)におけるremark「発言」の内容は Hang in there and give things a chance to developという命令文形式で、(22)におけるadvice「アドバイス」の内容はDitch Kimmyという命令文形式で表しうるものであり、それをそのまま動名詞にすると(21)と(22)のようになる

distinctly remember thinking **that** Harry was very refined when I saw that buttonとなり、統語構造がやや複雑になる。

からである。

なお、ここまでの議論で筆者は〈内容〉と〈話題・トピック〉が異なる概念であることを前提としてきたが、この前提についてここで補足説明を加えておきたい。筆者は、少なくとも典型的には、〈内容〉というのは〈話題・トピック〉に何か意味のある情報を足して完成するものであると考えている。たとえば、「愛犬のポチ」という〈話題・トピック〉に、「お座りと伏せの区別がつかない」という情報を足すことにより、「愛犬のポチはお座りと伏せの区別がつかない」という〈内容〉が完成する、という具合である。2つ前の文で「意味のある情報」という曖昧な表現を用いたが、これはある〈内容〉のどこを〈話題・トピック〉として取り出すかにある程度 of 自由が認められることを反映してのことである。たとえば、「昨日、横須賀線の品川駅のホームでオレンジジュースを購入した」という〈内容〉の〈話題・トピック〉を、下の表の [B-1] のように「昨日の行動」と考えることもできれば、[B-2] のように「昨日とった、横須賀線の品川駅のホームでの行動」と考えることもできる ([D-1] と [D-2])。

表1. 話題・トピックの自然な取り出し方と不自然な取り出し方

[A] 内容	[B] 話題・トピック	[C] [B] への追加情報	[D] [B] の 自然さ
昨日、横須賀線の品川駅のホームでオレンジジュースを購入した	[B-1] 昨日の行動	[C-1] 横須賀線の品川駅のホームでオレンジジュースを購入した	[D-1] ○
	[B-2] 昨日とった、横須賀線の品川駅のホームでの行動	[C-2] オレンジジュースを購入した	[D-2] ○
	[B-3] 横須賀線の品川駅のホームでオレンジジュースを購入すること	[C-3] 昨日した	[D-3] △

これは、[B-1]「昨日の行動」という〈話題・トピック〉に対して加えられる [C-1]「横須賀線の品川駅のホームでオレンジジュースを購入した」という情報も、[B-2]「昨日とった、横須賀線の品川駅のホームでの行動」という〈話題・トピック〉に対して加えられる [C-2]「オレンジジュースを購入した」という情報も、程度の差はあれ有意だと考えられるからである。その一方で、[B-3] のように「横須賀線の品川駅のホームでオレンジジュースを購入すること」を〈話題・トピック〉として捉え、そこに [C-3]「昨日した」という情報が加わって〈内容〉が出来上がるという考え方は、極めて奇妙に感じられる ([D-3])。これは [C-3]「昨日した」の部分の情報量が〈話題・トピック〉の [B-3]「横須賀線の品川駅のホームでオレンジジュースを購入すること」に比べてはるかに少なく、有意だと感じられにくいことに起因するもの

と思われる。

なぜこのような抽象的な補足説明を加えたかという点、次の第2.3.2節で見る実例で、*about*の補部名詞句が〈内容〉に対応するとも〈話題・トピック〉に対応するとも断言しにくいことを理解するのに役立つからである。

2.3.2. 前置詞*about*が導く要素が〈話題・トピック〉とも〈内容〉とも断定し難いケース

読者の中には、第2.3.1節の内容を踏まえて、(16)の記述に「〈話題・トピック〉のほかにも〈内容〉のケースもある」と付け加えればよいと考える向きもあるかもしれない。たしかに、(17)から(22)の例では、*about*の補部名詞句が〈思考・発話〉の〈内容〉に対応していると断定できた。しかし、以下の例では話はそう単純ではなく、*about*の補部名詞句が〈内容〉に対応するとも〈話題・トピック〉に対応するとも断言しにくい。

(23) Tom: What did you say to her?

Tuvok: Our conversation was private.

Tom: Well, whatever you said, she's talking **about** leaving.

(*Star Trek: Voyager*, Season 5, Episode 13, "Gravity")

トム： あんた彼女に何て言ったんだよ。

トゥヴォック： 他者に言える性質の会話ではなかった。

トム： 全く、何を言ったか知らないけどなあ、彼女もう出て行くとか言ってるんだぞ。

(24) 話し手（刑事コロambo）は、フォーマルなパーティーに参加しようと入り口まで来たが、服装がみすばらしいことをそれとなく指摘される。それに対する返答：

My wife said something **about** striped pants, but I thought that was too much.

(*Columbo*, Episode 33, "A Case of Immunity")

かみさんが「ズボンはストライプの方がいいんじゃないか」とかなんとか言ってみましたけど、そりゃあやりすぎだと思ひましてね。

(25) [...] they have a rule **about** too many flowers in the room.

(*Bewitched*, Season 2, Episode 18, "And Then There Were Three")

[...] 病院ってね、病室に花を置きすぎてはいけないっていう決まりがあるのよ。

(23)では、問題の女性が言ったことの〈内容〉は「私は出ていく」である。それを踏まえて*about*に後続する名詞要素を見てみると、*leaving*の意味上の主語が抜けており、命題形式をとっていないことから、*leaving*が問題の女性が言った〈内容〉に完全に対応するとは言えないことが分かる。少なくとも、(17)から(22)ほどきれいに〈内容〉と対応しているとは言えない。それでは、*leaving*が〈話題・トピック〉に対応しているのかという点、それも不自然な考え方だろう。なぜなら、「出ていくこと」が〈話題・トピック〉なのだと考えると、「私は出てい

く」という〈内容〉に到達するために足される情報が「私はする」という有意味と言い難いものになってしまうからである。「私は出ていきます」ということを宣言するにあたって、「これから、出ていくことについて言います。私はします」という構造を選択する人はまずいないだろう（「これから、私について言います。出ていきます」という構造を選択する人はいそうであることと対比されたい）。

(24) では、話し手（刑事コロンボ）の妻がした助言の〈内容〉はおそらく「あなたはストライプ柄のズボンを履いていくべきだ」である。ここにおいて「ストライプ柄のズボン」が〈話題・トピック〉になっているとは言いにくい。筆者には、妻の助言の〈話題・トピック〉は「夫の（するべき）格好」であるという見方の方がはるかに自然であるように思われる。また、*about* に導かれる名詞句である *striped pants* 「ストライプ柄のズボン」は、命題形式をとっておらず、もっと言えば (*wearing* などの) 動詞すら含んでいないので、妻の助言の〈内容〉ともきれいに対応しているとは言えない。

(25) では、病室の使い方の規則が問題となっている。この規則はおそらく *You are not allowed to have too many flowers in the room.* というものであり、*about* に後続している *too many flowers in the room* 「病室内の過剰な数の花」という名詞要素は、この規則の〈内容〉と呼ぶにはあまりにも情報が足りない。〔意味上の主語＋動名詞〕という構造をとっていないため命題形式をとっていないということに加えて、過剰な数の花を置いてはいけないという否定要素も抜け落ちている。「病室内の過剰な数の花」と規則の〈内容〉との距離は相当大きいと言わざるをえないだろう。それでは、「病室内の過剰な数の花」は〈話題・トピック〉なのか。それもやや不自然な捉え方であるように思われる。というのは、もしも「病室内の過剰な数の花」が〈話題・トピック〉なのだとしたら、〈内容〉に到達するために足される情報は「ダメだ」のようなものになるが、この「ダメだ」という情報は *too many* 「過剰な」という表現により示唆されているものであり、有意味性が低いからである。このように、(25) の *too many flowers in the room* もまた、〈話題・トピック〉とも〈内容〉とも言い切れない微妙な性質を持っている。

それでは、(23) から (25) にあるような、〈話題・トピック〉とも〈内容〉とも言い切れない要素は、一体どのような要素だと言ったらよいのだろうか。ここに別の概念的なラベル〈○○〉を貼りはじめると、次から次へと新しいラベル〈○○○〉、〈□□□〉、〈△△△〉…が必要になり、際限がなくなってしまう。第3節では、こうした問題を解決する新しい *about* 観を提示する。それが (7) の記述に対する真の修正案である。

しかしその前に、日本語母語話者はたとえ堅い文体であっても「について」を〈話題・トピック〉以外の要素とともに（たとえば第2.3.1節と第2.3.2節の英語例文に対応するような形で）使おうとは思えないことを確認しておきたい。それにより、(7) の記述は文体上の問題を越えたもっと深い意味での修正を必要とするものであり、それを怠っていると、英語学習者の *about* の使用が英語母語話者の *about* の使用に比べてずっと狭いものにとどまってしまう、ということが確認される。

2.3.3. 日本語母語話者は〈話題・トピック〉以外の要素とともに「について」を使うか

筆者は、日本語母語話者が「について」を〈話題・トピック〉以外の要素とともに用いることがどれくらいあるか、特に第2.3.1節と第2.3.2節の英語例文に対応するような表現を用いることがどれくらいあるかを調べる目的で、日本語を母語とする大学生30人を対象にアンケート調査を行った。(26)を印刷した用紙を配布し、無記名で空欄を埋めてもらった。答えに窮した場合には「？」という回答も認めた。

- (26) 「息子にはぜひとも大学に合格してもらいたいという願い」は何への願いかと言うと、「合格への願い」であるとも「息子の大学合格への親の願い」であるとも言えます。「将来への願い」も正しいです(言い方は他にもいくらでも考えられます)。また、「花子とスーザンがポチを散歩させたという出来事」を「○○という出来事」と表現しようとした場合、「犬の散歩という出来事」も「花子とスーザンによるポチの散歩という出来事」も適切だと言えます(言い方は他にもいくらでも考えられます)。では…
- a. 「机に本を置きすぎてはいけない、という決まり」は何についての決まりだと言えますか。
→ () についての決まり
- b. 「海外旅行に行くときに友だちを連れて行きなさい、というアドバイス」は何についてのアドバイスだと言えますか。
→ () についてのアドバイス
- c. 「今回の事件は大規模な窃盗団のメンバーによる犯行なのではないか、という仮説」は何についての仮説だと言えますか。
→ () についての仮説
- d. 「くじけずに頑張れよ、という発言」は何についての発言だと言えますか。
→ () についての発言
- e. 「この事故は飼い犬の仕業だ、という冗談」は何についての冗談だと言えますか。
→ () についての冗談
- f. 「履いていくズボンにはストライプ柄のほうがいいぞ、という助言」は何についての助言だと言えますか。
→ () についての助言

第2.3.1節と第2.3.2節の英語例文の引用元の映像を見たことがある学生がいると(それによりこの調査の意図に気が付かれると)いけないので、一部内容を変更している(たとえば「キミーをおいていく」→「友だちを連れて行く」)が、aboutの使用と「について」の使用を比較するうえで問題になるような変更ではないと考えてよいだろう。

第2.3.1節と第2.3.2節の英語例文のabout句を抜き出して、対応するアンケートの問題の順番に

合わせて並べ替えると、以下のようなになる。

- (27) a. about too many flowers in the room
- b. about ditching Kimmy
- c. about it being a professional killing
- d. about hanging in there
- e. about the accident being caused by a witch
- f. about striped pants

これと対応するような表現を用いるとなると、アンケートの回答は以下のようなものになるだろう。

- (28) 第2.3.1節と第2.3.2節の英語例文に対応する回答（例）
- a. 机の上の過剰な数の本, 机の上に存在する多すぎる本
- b. 海外旅行に行くときに友だちを連れていくこと, 友だちを連れていけということ
- c. 今回の事件は大規模な窃盗団のメンバーによる犯行であるということ
- d. くじけずに頑張ること, 頑張れということ
- e. この事故は飼い犬の仕業であるということ
- f. ストライプ (柄) のズボン

さて、問題は (26) のアンケートに (28) に類似した回答をした学生がどれ程いたかである。設問ごとの人数と、全体30人に占める割合を表にしたものが以下の表2である。

表2. 「について」を英文のaboutと同じように用いた回答者

設問	人数	割合
a	0	0%
b	2	6.6%
c	0または1	0%または3.3%
d	1	3.3%
e	0または2	0%または6.6%
f	0	0%

各設問のアンケート結果について詳説する。まず、設問aへの回答として多かったものは、「机に本を置くこと [とき・場合] (についての決まり)」(7人, 23.3%), 「机の上に置いてよい本の量 (についての決まり)」など「量」で締めくくるもの (5人, 16.6%), 「机の使い方

(についての決まり)」など「使い方」で締めくくるもの(4人, 13.3%)で、(28a)のようにtoo many books on the deskと対応する回答をした者はいなかった。

次に、設問bへの回答として多かったものは「(海外)旅行(についてのアドバイス)」(10人, 33.3%)、「(海外)旅行に行くこと[とき](についてのアドバイス)」(6人, 20.0%)で、他に「海外旅行に行くときに誰を連れて行くべきか(についてのアドバイス)」や「海外旅行する上での注意点(についてのアドバイス)」などの回答が見られた。(28b)に対応する回答としては「海外旅行は友達といけということ(についてのアドバイス)」と「海外旅行に友だちを連れて行くこと(についてのアドバイス)」があった。

設問cへの回答として最も多かったのは「今回の事件の犯人(についての仮説)」など「犯人[犯行者]」で締めくくるもの(16人, 53.3%)で、次に多かったのは「今回の事件」のように「事件[窃盗]」で締めくくるもの(7人, 23.3%)だった。(28c)にぴたりと対応するものは見られなかったが、「今回の事件が大規模な窃盗団のメンバーによる犯行」という回答が1件あり、これは「今回の事件が大規模な窃盗団のメンバーによる犯行であること」の書き損じである可能性があるので、上の表では「0または1」と記した。

設問dに対する回答で最も多かったのは、「くじけそうな時にかかる言葉(についての発言)」や「何か壁に向かう人への応援(についての発言)」など、発話・発言自体を答える回答で(7人, 23.3%)、次に多かったのが「？」(6人, 20.0%)であった。筆者にとって前者の「について」の使い方は不自然に感じられるが、該当する7人のうち1人が「？」とメモしていることや、2位が「？」であることを考慮に入れると、「について」を無理矢理使おうとしている可能性(実験デザインの不備で、回答者の本来の日本語の語感を問うことができていない可能性)がある。(28d)に対応する回答としては「くじけずに頑張れということ(についての発言)」(1名, 3.3%)が見られた。

設問eへの回答で多かったのは、「この事故(についての冗談)」のように起こったことを答えたもの(14人, 46.6%)、「この事故の原因(についての冗談)」や「誰がこの事故を起こしたのか(についての冗談)」など起こったことの原因を答えたもの(13人, 43.3%)だった。(28e)にぴたりと対応する回答はなかったが、「事故の責任は飼い犬である(についての発言)」と「この事故は飼い犬の仕業だという冗談(についての発言)」という回答は(28e)に近いと言えるので、表では「0または2」と記した。

最後に、設問fへの回答で多かったのは「履いていくズボンの柄[デザイン](についての助言)」(10人, 33.3%)、「(履いていく)ズボン(についての助言)」や「服装(についての助言)」など着用物を答えたもの(10人, 33.3%)だった。(28f)に対応する回答は1つもなかった。

筆者にとってこの結果は、日本語の「について」が〈話題・トピック〉とともに用いられるものであることを裏付ける結果であると言える。基本的に、多かった回答はすべて〈話題・ト

ピック)と言えるものである⁸。たとえば、「この事故」は「冗談」の〈話題・トピック〉であり、「履いていくズボンの柄」は「助言」の〈話題・トピック〉である。

以上のアンケート調査は極めて簡易なものであり、回答者数も少なく、細かい統計的議論を行うには十分でないが、それでも、**about**の使用範囲を〈話題・トピック〉に限定しては(堅い文体であれば「について」にびたりと対応するのだと考えていては)第2.3.1節と第2.3.2節の英語例文のようにして**about**を使えるようにならないであろうことは理解していただけるのではないだろうか。

3. 本稿の提案

3.1. 前置詞**about**の〈思考・発話〉用法についての一般化

これまで我々は、**about**が〈話題・トピック〉を導く場合、堅い文体では「について」という訳語が対応し、柔らかい文体では「の話を」など別の訳語が対応するが、そもそも**about**が導く要素が〈話題・トピック〉ではなく〈内容〉やその他の概念である場合があること(そしてその場合にはたとえ堅い文体であっても「について」と完全には対応しないこと)を見てきた。こうした事情を踏まえたうえで筆者が考える適切な一般化は以下のようなものである。

- (29) 前置詞**about**は、〈思考・発話〉を表す語句とともに用いて、それがどのような〈思考・発話〉であるのかを指定することができる。**about**の補部名詞句の選定の仕方に関しては、(i) 〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉を補部名詞句に据える場合もあるが、(ii) 話し手が参照しているセンテンス形式の〈思考・発話〉とほぼ同じ内容を表すセンテンスを聞き手が頭の中で復元できるように、元のセンテンスの全体または重要な一部を名詞化したものを補部名詞句に据える場合もある。(ii) のとき、補部名詞句が結果的に〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉に対応する場合もあるが、他にも〈思考・発話〉の〈内容〉など様々な要素と対応しうる。日本語訳に関しては、補部名詞句が〈話題・トピック〉に対応するならば、堅い文体では「について」が、柔らかい文体では「の話を」や「のことを」などが妥当であるが、補部名詞句が〈話題・トピック〉に対応しない場合があることを考えると、万能の訳語は存在しないと考えるべきである。

(29) の記述のうち、本稿のこれまでの議論でカバーできていないのはただ一箇所、(ii) の「話し手が参照しているセンテンス形式の〈思考・発話〉とほぼ同じ内容を表すセンテンスを聞き手が頭の中で復元できるように、元のセンテンスの全体または重要な一部を名詞化したものを補部名詞句に据える場合もある」という部分である。やや複雑な記述なので、ここで筆者が想

⁸ 例外は設問dへの回答で、「くじけそうな時にかかる言葉」や「何か壁に向かう人への応援」は少なくとも筆者にとっては「発言」の〈話題・トピック〉ではない。

定しているコミュニケーションのありかたを図示しておく。(ii)の説明文との対応を確認しながら見ていただきたい。

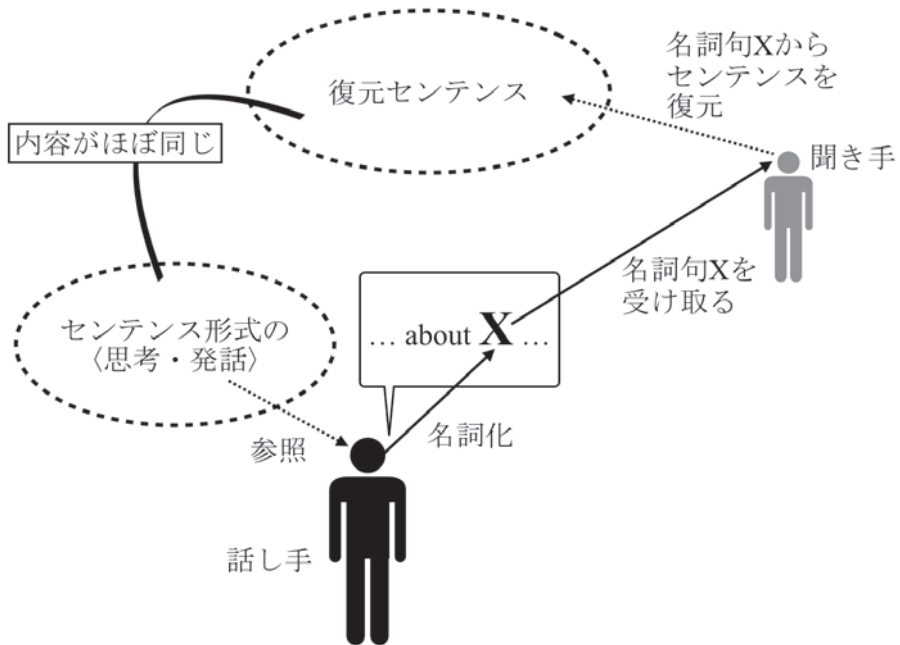


図1. (29) の用法 (ii) の記述で筆者が想定しているコミュニケーションのあり方

この図が示しているように、筆者は用法 (ii) ではaboutの補部名詞句がセンテンス復元のためのキュー (cue, 合図) として働くと考えている。第3節ではこの部分について詳説する。

第2.3.1節と第2.3.2節で問題となった英文を考え直してみよう。以下に該当箇所を抜き出して再掲する。

- (30) You remember what I said **about** you seeming normal ((17)から抜き出し)
- (31) thinking **about** Harry being very refined ((18)から抜き出し)
- (32) And it also proves my theory **about** it being a professional killing ((19)から抜き出し)
- (33) He kidded **about** the accident being caused by a witch (=20)
- (34) I made some lame remark **about** hanging in there and giving things a chance to develop ((21)から抜き出し)
- (35) I hope you take my advice **about** ditching Kimmy (=22)
- (36) she's talking **about** leaving ((23)から抜き出し)
- (37) My wife said something **about** striped pants ((24)から抜き出し)
- (38) they have a rule **about** too many flowers in the room (=25)

これらの例のaboutの補部名詞句は、聞き手が以下の引用符内に示したセンテンス形式の〈思

考・発話) を頭の中で復元できるように、そのセンテンスの全体または重要な一部を名詞化したものと考えられる。なお、引用符内のセンテンス全てに「など」という言葉を付けているのは、聞き手が復元を期待されるセンテンスは「一語一句違わずこれでなければならない」という厳密な性質のものではないからである(第3.5節も参照)。

- (39) You remember what I said **about** you seeming normal
↓
“You seem normal” や “You seem normal enough” など
- (40) thinking **about** Harry being very refined
↓
“Harry is very refined” や “This Harry, he is very refined” など
- (41) And it also proves my theory **about** it being a professional killing
↓
“It is a professional killing” など
- (42) He kidded **about** the accident being caused by a witch
↓
“The accident was caused by a witch” など
- (43) I made some lame remark **about** hanging in there and giving things a chance to develop
↓
“Hang in there and give things a chance to develop” など
- (44) I hope you take my advice **about** ditching Kimmy
↓
“Ditch Kimmy” や “You should ditch Kimmy” など
- (45) she’s talking **about** leaving.
↓
“I’m leaving” や “I’m going to leave” など
- (46) My wife said something **about** striped pants
↓
“You should wear striped pants to the party” や
“Why don’t you wear striped pants to the party” など
- (47) they have a rule **about** too many flowers in the room
↓
“You are not allowed to have too many flowers in the room” など

第2.3節で問題になったのは、**about**の補部名詞句は〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉に対応していない場合ならば必ず〈思考・発話〉の〈内容〉と対応しているという性質のものでは

なく、そのため〈話題・トピック〉に対応していない補部名詞句のステータスについて一般化を行うのが難しいということであった。これに対し第3節では、**about**の補部名詞句が〈思考・発話〉の〈話題・トピック〉に対応していない場合 (e.g., (30)-(38)) , その補部名詞句は聞き手にセンテンスの形を取った〈思考・発話〉を復元させるためのキューとして働いているということを明らかにする。これは〈思考・発話〉と結びついた**about**の意味・用法の一般化に向けた重要な一歩である。ただし、**about**の補部名詞句がセンテンス復元のキューとして働かない(そのかわりに〈話題・トピック〉と対応する) 場合もあるので、**about**は〈思考・発話〉と結びついた場合に限っても多義的だということになる。この多義性をどう捉えるべきかについての筆者の考えは第3.5節で述べる。

3.2. センテンスの復元のしやすさ

ここで、(29) の用法 (ii) における「センテンス形式の〈思考・発話〉」の復元のしやすさについて補足しておきたい。一般に、聞き手が省略的な表現をキューとして非省略的な概念に到達できるかどうか、そしてその到達を話し手が期待できるかどうかは、聞き手が一般的知識や場面に関連した知識をどのくらい持っているか、そして話し手が聞き手のそうした知識量についてどう考えているかに応じて変動するものである。このことは**about**の使用についても当てはまる。たとえば、(42) のように**about**の補部名詞句が意味上の主語と動名詞の組み合わせになっていると、そもそもこの名詞句が命題形式に近い形式をとっているため、センテンスの復元は相当容易であるが、(46) の *striped pants* の場合には、聞き手が復元を期待されているセンテンスが何なのかはコンテキストに関する情報がないと特定できない。(46) の発話者(刑事コロンボ)が、聞き手はきっと *striped pants* というキューから「ストライプ柄のズボンしか売っていない服屋さんを一緒に開きましょ」でも「ストライプ柄のズボンのブームは去ったわね」でもなく「パーティーに履いていくズボンはストライプ柄がいいわよ」と復元してくれるだろう、と期待できるのは、聞き手が話し手と同じフォーマルなパーティー会場にいて、パーティーにふさわしい服装をしているかどうかの話をしているからである。

このこととの関連で、(29) の「センテンスの形を取った〈思考・発話〉を聞き手が頭の中で復元できるように、そのセンテンスの全体または重要な一部を名詞化したものを補部名詞句に据える場合もある」という部分をもう一度見てみよう。「重要な一部」という言葉で筆者が意図したのは、センテンスの復元へのキューとしての役割を果たしてくれそうな部分、ということである。その役割を果たしてくれそうにないものは**about**の補部に現れにくい。たとえば (46) の場面で、聞き手に *You should wear striped pants to the party* を復元してもらいたいと思っている場合、*party* や (*striped* という限定形容詞をつけない) *pants* はキューとして役に立たないだろうから「重要な一部」とは言えず、実際、**about**の補部に現れにくい。

3.3. センテンスの復元のさらなる例

この第3.3節では、(29) の用法 (ii) における**about**の補部名詞句と、復元されることが期待さ

れているセンテンスの対応関係の多様性を理解していただくために、筆者が収集した実例をさらに提示したい。以下の各ペアのaが実例であり、b（およびc）がaboutの補部名詞句からセンテンスを復元したものである。ここでも、第3.1節で述べたのと同じ理由により、復元後のセンテンスに「など」を付けている。なお、第3.3節はaboutの習得を目的としてこの論文を読まれている読者に向けた節であり、それ以外の読者はこの節を飛ばして読んでいただいて構わない。

- (48) a. “Why isn’t Uncle Ben’s name on the card?”

[...]

I say something **about** it being an oversight.

(Emily Giffin, *Baby Proof*; 太字と下線は筆者)

「どうしてベン叔父さんの名前が書いてないの？」

[...]

私は、見落としだとかいったような返答をする。

- b. “It’s an oversight” など

- (49) a. How lucky you are to be married to someone like my son. You’ll never have to worry about finding lipstick on his collar. And if you do, he won’t give you some idiotic story **about a waiter dropping lingonberry pie on him**, especially when lingonberries are out of season.

(*Bewitched*, Season 4, Episode 9, “Out of Sync, Out of Mind”)

サマンサ、あなたは幸運よ、うちの息子のような男の奥さんでいられて。襟に口紅つけて帰ってくる心配なんていないんですから。もしそんなことがあっても、うちの子は（私の旦那のように）「ウェイターがリンゴンベリーパイを落としたんだよ」とか馬鹿みたいな言い訳したりしませんからね。しかもよりによってリンゴンベリーなんて穫れない時期に。

- b. “A waiter dropped lingonberry pie on me” など

- (50) a. He’s been acting so strange. He just backed out of our stay-in-school campaign with some weird excuse **about having to paint the driveway**.

(*Full House*, Season 6, Episode 6, “Educating Jesse”)

ジェシー叔父さんがさっきから変なの。ドライブウェイにペンキを塗らないといけないとか何とかわけのわからない言い訳して、私たちの退学防止キャンペーンを手伝わなくて逃げたのよ。

- b. “I have to paint the driveway” など

- (51) a. No, not that dream. [...] No, I mean your dream **about making it as a sportscaster**.

(*Full House*, Season 1, Episode 7, “Knock Yourself Out”)

違う、その夢じゃない。[...] そうじゃなくて、俺が言ってるのは、スポーツキャスターとして成功するんだ、って夢だよ。

- b. “I’ll make it as a sportscaster” など

- (52) a. Andy has been talking **about quitting** since his very first day of work [...]
(Emily Giffin, *Love the One You're With* ; 太字と下線は筆者)
アンディーは仕事の初日からずっと「辞めようかな」と言っている [...]
- b. “Maybe I should quit my job” や “I want to quit my job” など
- (53) a. When he started talking **about going off to work in Iraq**, his parents went into a tailspin of panic.
(Paul Auster, *Man in the Dark* ; 太字と下線は筆者)
イラクへ仕事に行くとタイトスが言い出したとき、両親はパニックに陥った。
(柴田元幸 (訳) 『闇の中の男』)
- b. “I’m going off to work in Iraq” など
- (54) a. I’ve been having a little fun teasing Jesse **about being predictable**, but I see that it’s really bothering him, so ...
(*Full House*, Season 7, Episode 13, “The Perfect Couple”)
ジェシーのこと「分かりやすい男だ」ってからかって遊んでたけど、なんか本当にイヤみたいなの。だから、…
- b. “You’re predictable” など
- (55) a. Wayneの電話口での発言。電話の相手 (Theresa) が、テレビ番組で Wayne と結婚すると宣言したことを、番組を見逃した Wayne は知らなかった。
I didn’t hear what you said **about marrying me** until about 2:00 am from a bartender of all people.
(*Columbo*, Episode 55, “Murder in Malibu”)
君が僕と結婚するって言ってくれたって聞いたの、午前2時なんだぜ。よりによってバーテンから。
- b. “I’ve just decided I’m going to marry him as soon as I can”⁹ など
- (56) a. Paris: About what you said ... I mean ... the part **about ... being in love with me**. I realize you were suffering from oxygen deprivation and we were literally seconds away from death, so I know you probably didn’t mean it.
Torres: Oh, no, no I meant it.
(*Star Trek: Voyager*, Season 4, Episode 5, “Revulsion”)
パリス : 君がこの前言ったことなんだけど...あの...その...僕のこと好きだって話。あのときはほら、酸素が足りなくて死にそうで、大袈裟じゃなくて死ぬ数秒前だったじゃん。だからきつと本気で言ったわけじゃないだろうって分かってるから。
トレス : え、いやいや、本気で言ったのよ。
- b. “I’m in love with you”¹⁰ など

⁹ 作中のTV番組でTheresaが実際に言ったセリフ。

¹⁰ ただし、作中でトレスが実際に言ったセリフはI love youであってI’m in love with youではない。このことは1つ前のエピソードで確認できる (*Star Trek: Voyager*, Season 4, Episode 3, Day of Honor)。

- (57) a. Doctor: Still having headaches?
Janeway: I don't need any more lectures **about** working too hard, Doctor.
(*Star Trek: Voyager*, Season 4, Episode 7, "Scientific Method")
ドクター: 頭痛まだ治りませんか。
ジェインウェイ: 働きすぎだっていうお説教はもう結構よ, ドクター。
- b. "You're working too hard" や "Don't work too hard" など
- (58) a. [...] we have a strict policy **about** leaving our technology in the hands of other cultures. It often has damaging consequences.
(*Star Trek: Voyager*, Season 7, Episode 21, "Natural Law")
[...] 宇宙艦隊には厳しい規則があつて, 自分たちの機器を他の文化圏に渡したまま去つてはならないということになってます。それによって深刻なトラブルが起こることが多いものですから。
- b. "We are not allowed to leave our technology in the hands of other cultures" など
- (59) Cate: Maybe we should let them go out.
Paul: Cate, we have a firm and arbitrary policy **about** older guys.
(*8 Simple Rules*, Season 1, Episode 27, "Sort of an Officer and a Gentleman (Part 1)")
ケイト: ブリジットとドニー・ドイルにデートを許してあげてもいいんじゃないかしら。
ポール: ケイト, うちには「年上の男はアウト」っていう厳格で独裁的なルールがあるじゃないか。
- c. "Our daughters are not allowed to date older guys" など
- (60) a. As for Morrie? Well, I thought about him now and then, the things he had taught me **about** "being human" and "relating to others," [...] ¹¹
(Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie* ; 太字と下線は筆者)
モリーのことは忘れてしまったのかって? いやそんなことはなく, 時々「人間らしくあれ」とか「他人の身になって考えてみよ」とかモリーに教わったことを思い出した [...]
- b. "Be human" や "You should be human" など
- c. "Relate to others" や "You should relate to others" など
- (61) a. The next morning, I called Eastman House to inquire **about** seeing the films in their collection.
(Paul Auster, *The Book of Illusions* ; 太字と下線は筆者)

¹¹ **about**の補部名詞句には引用符が付けられている。ということは, この補部名詞句はモリー先生の発言を引用したものだということになる。このことと, 引用元のモリー先生の発言はおそらくセンテンスの形式をとっていたであろうことを考え合わせると, この補部名詞句は何らかのセンテンスを参照しながら導入されたものであると言える。このように, この例の引用符の存在は筆者の主張のサポートになる。引用と**about**の関係については3.4節も参照。

翌朝私はイーストマン・ハウスに電話して、コレクションのなかの作品を見せてもらえるかどうか訊ねてみた。(柴田元幸(訳)『幻影の書』)

- b. “May I see the films in your collection?” など
(62) a. If any of you have any doubts **about being able to successfully solve this case**, I beg you, think long and hard about the wisdom of dropping it right now.

(*Columbo*, Episode 51, “Columbo Cries Wolf”)

今回の事件をちゃんと解決できるかどうか怪しいんじゃないかと思う人が1人でもいたら、頼むからしっかり検討してくれ。今すぐ今回の件から手を引くのが賢明である可能性を。

- b. “Will we be able to successfully solve this case?” など
(63) a. How about London? Louise said something **about seeing a man with her baby on Wesley Street**.

(*Bewitched*, Season 2, Episode 4, “My Grandson, the Warlock”)

ロンドンを探してみた？ ルイーズが、ウェズリー・ストリートで男がジョナサンを抱いているのを見たとかなんとか言っていたんだけど。

- b. “I saw a man with my baby on Wesley Street” など
(64) a. 自宅に刑事コロンボがやってきたが、本題に入らず無駄話を始めるので苛立って You said something **about brevity**? (*Columbo*, Episode 63, “Butterfly in Shades of Grey”) 手短に済ませるとかなんとか言っていなかったかね？

- b. “I’ll try and make this brief”¹² など
(65) a. “Oh, dear *God*! There *is* trouble!” she practically shouts. “I *know* when there’s trouble.”

My dad mutters something **about how fitting that is**, on account of her being the cause of most of it.

(Emily Giffin, *Baby Proof*; 太字と下線は筆者)

「ほら、やっぱりそうなのね！ やっぱりあなたたち、何かあったのね！」母親は叫び声に近い声をあげる。「何かあると分かっちゃうのよね、私」

父親が「そりゃそうだろう」というようなことを呟く。というのも、何かあるのはたいてい母親のせいだからだ。

- b. “How fitting that is!” など

3.4. センテンスが参照されていることを示す証拠

筆者の(29)の記述が正しければ、用法(ii)において話し手は何らかのセンテンス形式の〈思考・発話〉を参照している(そして聞き手がそれに近い〈思考・発話〉のセンテンスを還元してくれることを期待している)ことになるが、これが正しいことを示す証拠をいくつかあげることができる。まず、**about**の補部が動名詞などの名詞句ではなく定形節(時制を持つ節)になっている実例がある。

¹² 作中で刑事コロンボが実際に言ったセリフ。

- (66) Lisaの婚約者の老人Cliffordが心臓発作で亡くなった。これについてのLisaの言葉を刑事が引用する場面：

Well, she [...] said something **about uh everybody's after the old fella's money and that uh he was too healthy to die like that.** (Columbo, Episode 17, "Double Shock")

リサさんは [...] 死んだ爺さんの金をみんなが狙ってる、あんな健康な人がこんな風に死ぬはずがない、とか何とか言っていたよ。

- (67) [...] I'm tickled for (Braves' owner) Ted Turner because he went through some lean years. A few years ago, people were talking **about he should sell the ballclub or move the ballclub.** Now, here we are, in the World Series. (COCA ; 太字と下線は筆者)

[...] (ブレーブスのオーナーの) テッド・ターナーのことを思うと私も嬉しい。なにせ彼は苦しい時代を経験したから。2, 3年前はみんなして「ターナーは球団を売却すればいい」とか、「球団を別の場所に移転しろ」とか言っていた。それが今ではご覧の通り、ワールドシリーズに出ている。

こうした例をある種の言い間違いとして片付ける向きもあろうが、この種の言い間違いが日常会話で度々発生するということは、まさしくaboutの使用時に〈思考・発話〉のセンテンスが参照されていることの証拠である。

次に、aboutの補部名詞句の中に間投詞が入り込んでいる実例がある。(68) を見てみよう。

- (68) Phyllis always kids him **about breaking up bank robberies, ha ha ha**, but that was actually how he'd got shot. (Ed McBain, "Where or When")

フィリスはいつも、「あんたが銀行強盗を食い止めるだって？ ハハハ」と言って、彼のことを馬鹿にする。しかしあいにく彼はまさに銀行強盗を食い止めようとして撃たれたのだ。

この例では、語り手が **You break up bank robberies, ha ha ha** というセンテンスを参照して(その上でそのうちの重要な部分を名詞化しようとして) いるのだと考えない限り、**ha ha ha**がこの位置で用いられていることの説明がつかないだろう。

最後に、aboutの補部名詞句が「引用実詞」になっている実例がある。「引用実詞」とは、Jespersen (1933: 73) のquotation substantiveの訳語で、説明的に言えば「誰かの言葉を引用して名詞として利用したときの、その名詞のこと」である。重要なのは引用元の「誰かの言葉」が名詞でなくてもよいということである。

- (69) Your *late* was misheard as *light*. (Jespersen 1933: 73 ; 斜体原文)
あなたが言った*late*が、誤って*light*に聞こえた。

- (70) All the “*Thou shalt not’s*” of the Bible. (Ibid. ; 斜体原文)
 聖書に含まれている全ての*Thou shalt not*.

本来形容詞であるはずの*late*と本来定形節であるはずの*Thou shalt not*が、(69) と (70) では名詞要素として振る舞っている。こうしたことが引用という言語現象では許されるのである。これを踏まえて、次の実例を見られたい。

- (71) Danny: You heard her. She thinks I’m the smartest, most handsome dad in the whole universe.
 Jesse: She didn’t say anything **about** “handsome.”
 Danny: Well, it goes without saying.

(*Full House*, Season 3, Episode 11, “Aftershocks”)

- ダニー： 聞いてただろ。ステファニーは僕のことを宇宙全体で一番頭が良くて、ハンサムなパパだと思っているのさ。
 ジェシー： 「ハンサム」とは言ってなかつただろ。
 ダニー： いやまあそれは言うまでもないからだろ。

(71) で、*about*の補部名詞句として*handsome*という本来形容詞であるはずのものが現れることが許されるのは、この*handsome*が引用実詞だからであると説明できる。引用実詞であるということは、そこには引用元となる発話があるはずであり、その引用元の発話とは直前の*My dad is the smartest, most handsome dad in the whole universe*というセンテンスである。したがって、ジェシーは*about*の補部名詞句の選定にあたってセンテンスを参照していると言える。このセンテンスを参照しながら、その重要な部分を名詞化して取り出すと、引用実詞としての*handsome*が*about*の補部名詞句の位置に現れることになるのである。そして、ジェシーはこの引用実詞としての*handsome*から、聞き手(ダニー)が*I’m the most handsome dad in the whole universe*というセンテンスを復元することを期待しているのだと考えられる。

3.5. 用法の連続体

ここで、(29) において*about*の用法の連続体が想定されていることに注意されたい。まず、用法 (i) においてはセンテンスの参照はなされず、〈話題・トピック〉が提示されるのみである。たとえば、(72) で引用した動画では、言語に関する説明が統語論、音声学、語用論など様々な観点からなされており、話し手(Steven Pinker)が特定のセンテンスを参照しており聞き手にもそのセンテンスの復元を求めていると考えるのは自然ではない。

- (72) My name is Steven Pinker, and I’m Professor of Psychology at Harvard University. Today I’m going to speak to you **about** language.

(https://www.youtube.com/watch?v=Q-B_ONJIEcE)

私はスティーブン・ピンカーといいます。ハーバード大学の心理学科の教授です。
今日は皆さんに言語についてお話ししたいと思います。

用法 (ii) の一部のケースでは、**about**の補部名詞句が〈思考・発言〉の〈話題・トピック〉に相当する。たとえば、

- (73) A: Did you hear **about** my dog?
B: Yes. I'm sorry.
A: 私の飼い犬のこと（＝飼い犬が先週死んだということ）は聞きましたか。
B: はい。お気の毒に。

という会話では、**about**の補部名詞句であるmy dogは、(74) に示すようにMy dog died last weekなどのセンテンスを復元するキューとなっているが、同時に〈話題・トピック〉にもなっている（「私の飼い犬が先週死んだんだ」＝「私の飼い犬について言うとなね、先週死んだんだ」）。

- (74) Did you hear **about** my dog?
↓
“My dog died last week” など

そして用法(ii)の他のケースでは、**about**の補部名詞句がセンテンス復元のキューとしては機能するが〈話題・トピック〉ではない。たとえば、第2.3.1節と第2.3.2節で確認したように、(75) と(76) の補部名詞句であるditching Kimmyとstriped pantsは〈話題・トピック〉ではない。

- (75) I hope you take my advice **about** ditching Kimmy. (= (22))
(76) My wife said something **about** striped pants, but I thought that was too much. (= (24))

このように本稿の記述 (29) は、〈話題・トピック〉を導入するがセンテンス復元のキューとしては働かない $about_x$ と、〈話題・トピック〉を導入せずセンテンス復元のキューとして働く $about_z$ が、〈話題・トピック〉を導入してかつセンテンス復元のキューとして働く $about_y$ を介して連続的につながっている ($about_x$ — $about_y$ — $about_z$) , ということを行っているのである。

ただしここで注意されたいのが、筆者は決して「境界・輪郭のはっきりした3つの用法 ($about_x$ と $about_y$ と $about_z$) に重なっている部分があって、連続体が形成されている」と言っているのではないということである。 $about_x$ と $about_y$ と $about_z$ という3つのサブカテゴリーは、境界・輪郭がはっきりしたサブカテゴリーではない。

これは何よりもまず、**about**が〈話題・トピック〉を導入していると言えるかどうか（第2.3.1

節で論じた通り) 程度問題であることによる。about_xとabout_yというサブカテゴリーの成員の中には、いかにも〈話題・トピック〉らしいものを導く中心的な成員もいれば、低めの〈話題・トピック〉性を帯びたものを導く周辺的な成員もいるということである。これにより、about_{x, y}とabout_zの間の境界がぼやけることになる。

また、aboutの補部名詞句によりセンテンスの復元が期待されていると言えるかという点に関しても、程度問題だと言わざるを得ない。たとえば(76)では、復元が意図されているセンテンスがYou should wear striped pants to the partyなのかWhy don't you wear striped pants to the partyなのかははっきりしない。他にも様々な復元方法がありえる。話し手(刑事コロombo)が妻から言われたセンテンス自体はもちろん特定のであり、話し手はそれを参照して発話しているわけだが、聞き手が復元することを期待されているセンテンスはそれに内容上近いものであれば十分であり、特定のこれではなければならないという類のものではない。センテンスの復元が期待されているとは考えにくいようなケースは、この不特定性(抽象性)がさらに高まったものとみなすことができる。たとえば、(72)で見た講演冒頭のToday I'm going to speak to you about languageは、センテンスの復元が期待されているとは考えにくい例としてあげたものだが、実は、Language is X「言語とはXなものである」というように究極的に不特定化(抽象化)されたセンテンスの復元が期待されているのだと考えることもできる。そのように考えても実質的な文意にほとんど違いは生じない。この段落の議論から、aboutの補部名詞句によりセンテンスの復元が期待されていると言えるかが程度問題であることになり、about_xとabout_{y, z}の間の境界がぼやけることになる。

以上、第3.5節では、(29)の記述の意味するところを連続体という観点から明示した。〈話題・トピック〉を導入するがセンテンス復元のキューとしては働かないabout_xと、〈話題・トピック〉を導入してかつセンテンス復元のキューとして働くabout_yと、〈話題・トピック〉を導入せずセンテンス復元のキューとして働くabout_zが、境界の不明瞭な連続体をなしていることを示した。このように言語の連続性を認識していても、分析者はそこに線引きを行い、サブカテゴリーを認定したりいくつかの意味・用法に区切ったりせざるを得ない。そうでなければ分析という行為がそもそも行えなくなる¹³。しかし、どのような線引きも等しく妥当であるとは言い難い。特定の研究における特定の線引きが妥当であるためには、分析者が自分の行っている選択について自覚的に認識していること、そして、その選択が当該の分析の目標の達成に寄与するものであることが必要だろう。筆者は、トピック性とセンテンスの復元可能性という2つのファクターを重視し、その他のファクターを考慮に入れないという選択をしている。その選択は、aboutをトピック性の観点からのみ見る従来の分析では使用実態を捉えられないことを説得的に読者に伝達するという本研究の目標に寄与している。このような観点から、本稿の分析は、連続体だと強調しつつ分類を示すという矛盾を含みながらも、一定の妥当性を持った分析として提示できるだろう¹⁴。

¹³ 「分析」という語に「分ける」や「分割」と同じ「分」の漢字が用いられていることは偶然ではない。

¹⁴ この段落の内容は、「実態の連続・非連続」と「分析者による連続化・非連続化」の関係に関するLangacker

3.6. よくある言い回し

本稿の記述 (29) は前置詞aboutの意味と用法について出来る限りの一般化を試みたものであるが、このような記述を提示しているからといって、筆者は「英語母語話者は当該のaboutについて (29) の知識しか持っていない」と主張しているわけでもなければ、「英語母語話者は発話の現場で常に (29) の知識を参照している」と主張しているわけでもない。また、「英語学習者は (29) だけ覚えておけばよい」と言っているわけでもない。英語母語話者は、(29) のように抽象的な知識だけでなく、aboutを含んだよくある言い回しという具体的な知識も持っているだろう。そして英語学習者は (29) だけ覚えて満足するのではなく、aboutを含んだよくある言い回しを覚える努力をする必要があるだろう。

抽象的な知識に加えて具体的な知識も蓄えているという言語知識のありかたは、一見余剰的なものに思われるかもしれないが、ごく自然なものである。日本語を例にいくつか例を出そう。たとえば、日本語の「かえて」という副詞要素 (e.g., そんなことをしていたら、完成がかえて遅くなってしまう) の抽象的意味に関する知識は日本語母語話者の頭の中に確かに存在しているだろうが、それと同時に「かえて逆効果」など高頻度の言い回しを丸ごと記憶しているのではないだろうか。同じことが名詞の「治安」にも言える。治安とは「ある特定の地域の安全性」のことだという抽象的な意味知識と、よく「治安が良い・悪い」という言い方をするという具体的な使用に関する知識の両方を持っている日本語話者が多いだろう。また、筆者は自分が「追う」という動詞の「本質的意味」とでも言うべき知識を持っているように感じられるが、それと同時に、子供のころテレビが大好きだったためか、「前の車を追ってくれ」という文を丸ごと記憶している。最後に、日本語を母語とする大学生約30名に「そんなこと急に言われても」の続きを答えてもらったところ、ほぼ全員が「無理」または「困る」と答え、それら以外の回答をした人も「そんなこと急に言われても無理・困る」には明らかに聞き覚えがあるという反応を示した。この学生たちは「そんな」や「急に」などの各要素の抽象的・本質的意味を知っていながら同時に「そんなこと急に言われても無理・困る」という言い回し全体も記憶していたと考えられる。そうでなければ「そんなこと急に言われてもびっくりしちゃうじゃないか」など色々な回答が得られたはずである。このように、一つひとつの要素の本質的・抽象的意味を知っていることと、その要素を含んだよくある言い回しを丸ごと覚えていることは両立するものなのである¹⁵。

本稿で扱っているaboutに関して言えば、以下の例文から分かるように、What did I tell you about doing ...? 「…しちゃダメって言ったでしょ」、talk about doing ... 「…しようとかいったようなことを言う」、say something [anything, etc.] about ... 「…というようなことを言う」、what I [you, we, etc.] say about ... 「私 [あなた, 私たち, etc.] の…というような発言」がよくある言い

(2006) の議論に基づいている。

¹⁵ こうした言語知識のありかたは、「使用基盤モデル」(usage-based model) という言語モデルで捉えられてきた。理論的出发点としてLangacker (1988) を、実例が豊富な最近の研究としてBybee (2010), Taylor (2012), 平沢 (2019) を、心理実験のデータに基づく研究としてGoldberg (2019)を参照されたい。

回しとしてのステータスを持っているようである^{16, 17}。

- (77) a. Mater! What did I tell you about talking to the accused? (映画*Cars*)
 メイター、被告人と喋るんじゃないと言っただろうが。
- b. Nicholas, what did I tell you about riding that motorcycle in the bedroom?
 (*Full House*, Season 5, Episode 21, “Yours, Mine and Ours”)
 ニコラス、寝室でバイク乗っちゃダメって言ったでしょう。
- (78) a. Well, whatever you said, she’s talking about leaving. ((23)から抜き出し)
 全く、何を言ったか知らないけどなあ、彼女もう出て行くとか言ってるんだぞ。
- b. Andy has been talking about quitting since his very first day of work [...] (=52a)
 アンディーは仕事の初日からずっと「辞めようかな」と言っている [...]
- c. When he started talking about going off to work in Iraq, his parents went into a tailspin of panic. (=53a)
 イラクへ仕事に行くとタイタスが言い出したとき、両親はパニックに陥った。
- (79) a. My wife said something about striped pants, but I thought that was too much. (=24)
 かみさんが「ズボンはストライプの方がいいんじゃないか」とかなんとか言ってましたけど、そりゃあやりすぎだと思ひましてね。
- b. I say something about it being an oversight. ((48a)から抜き出し)
 私は、見落としだとかいったような返答をする。
- c. How about London? Louise said something about seeing a man with her baby on Wesley Street. (=63a)
 ロンドンを探してみた？ ルイーザが、ウェズリー・ストリートで男が子どもを抱いているのを見たとかなんとか言ってたんだけど。
- d. You said something about brevity? (=64a)
 手短に済ませるとかなんとか言っていなかったかね？
- e. Well, she [...] said something about uh everybody’s after the old fella’s money and that uh he was too healthy to die like that. (=66)
 リサさんは [...] 死んだ爺さんの金をみんなが狙ってるとか、あんな健康な人がこんな風に死ぬはずがないとか言っていたよ。
- f. She didn’t say anything about “handsome.” ((71)から抜き出し)
 「ハンサム」とは言っていなかっただろ。

¹⁶ これらの形式がそれぞれ「…することについて喋る」「…について何か言う」「…についての私[あなた、私たち, etc.]の発言」の意味を表すこともある。その可能性を否定しているわけではないことに注意されたい。

¹⁷ [talk+前置詞+doing], [say+something [anything, etc.]+前置詞], [what+人間+say+前置詞] という3つの構文の前置詞スロットを埋める前置詞の頻度分布について、Brorström (1963: 77-78, 164-165, 313) を参照すると、(他の多くの構文と同様に) これら3つの構文全てにおいて「ofの頻度が減少し、aboutの頻度が増加する」という通時的変化が起こったことが分かる。

- (80) a. You remember what I said about you seeming normal? Forget it. ((17)から抜き出し)
さっき、普通そうに見えるとか言ってしまったの覚えてますか？ あれ、なかった
ことにして下さい。
- b. I didn't hear what you said about marrying me until about 2:00 am from a bartender of all
people. (=55)
君が僕と結婚するって言ってくれたって聞いたの、午前2時なんだぜ。よりによって
バーテンから。
- c. About what you said ... I mean ... the part about ... being in love with me.
((56)から抜き出し)
君がこの前言ってたことなんだけど…あの…その…僕のこと好きだって話。

4. まとめ

本稿では、前置詞aboutの補部名詞句に発話・思考・知識・情報などの〈話題・トピック〉が現れる場合、日本語では「…について」だけでなく、「…の話を」や「…のことを」などの訳語が対応することを確認したうえで、aboutの補部名詞句には発話・思考・知識・情報などの〈内容〉など様々な要素が現れることから、aboutについて(29)の一般化を提案した。(29)は、用法の連続体を想定したもので、また言い間違いなど証拠となるデータもあり、適切な記述であると考えられる。また、(29)は抽象的な言語知識を記述したものであるが、aboutを含んだ具体的な言い回しを母語話者が記憶していることを否定するものではないということを確認した。

本稿の締めくくりとして、冒頭の翻訳について再考したい。和文と英文のペアを以下に再掲する。

- (81) a. 信吾は里子のきものを買いに出了とは言わなかった。
b. Shingo said nothing **about** having gone out to buy her a kimono.
- (82) a. 環はいつもダイエットをしなくちゃと言っている。
b. Tamaki always talked **about** going on a diet [...]
- (83) a. ふかえりの両親が死んだという彼らの言い分を、戎野先生はそのまま受け入れたの
です
b. Did Professor Ebisuno accept what they said **about** Fuka-Eri's parents being dead?

上の3つの和文の「里子のきものを買いに出了」、「いつもダイエットをしなくちゃ」、「ふかえりの両親が死んだ」が発言の〈内容〉にあたる。そして、多くの日本人英語学習者がaboutと結びつけて記憶している「について」という日本語は、基本的に〈話題・トピック〉とともに用いるものであって、〈内容〉とともに用いるものではない。だから上の3つの和文を英語に翻訳しようとしたときにaboutを使おうとは思えないのである。

本稿で示してきたように、aboutはまさに〈内容〉を導くのに頻りに用いられる。そして、

aboutを用いたよくある言い回しに, *talk about doing ...*「…しようとかいったようなことを言う」, *say something [anything, etc.] about ...*「…というようなことを言う」, *what I [you, we, etc.] say about ...*「私 [あなた, 私たち, etc.] の…というような発言」がある。だから上の3つの和文を英語に翻訳しようとしたときに*about*を使うことが自然な選択肢として思い浮かぶのである。

参考文献

- Brorström, Sverker (1963) *The increasing frequency of the preposition about during the Modern English Period*. Stockholm: Almqvist and Wiksell.
- Bybee, Joan (2010) *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davies, Mark (2008-) *The corpus of contemporary American English (COCA): 560 million words, 1990-present*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Goldberg (2019) *Explain me this: Creativity, competition, and the partial productivity of Constructions*. Princeton: Princeton University Press.
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞byの意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ』東京：くろしお出版。
- Hohenhaus, Peter (2000) An overlooked type of word-formation: Dummy compounds in German and English. In: C. Hall, D. Rock and A. Fiddler (eds.) *German studies towards the millennium: Selected papers from the conference of university teachers of German, University of Keele, September 1999 (Cutg Proceedings 2)*, 241-260. Oxford: Peter Lang.
- Jespersen, Otto (1933) *Essentials of English grammar*. London: George Allen and Unwin.
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』東京：大修館書店。
- 日下部徳次 (1955) 『前置詞 (上)』東京：研究社。
- Langacker, Ronald W. (1988) A usage-based model. In: Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in cognitive linguistics*. Amsterdam: Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2006) On the continuous debate about discreteness. *Cognitive Linguistics* 17(1): 107-151.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik (2002) *A communicative grammar of English*. London: Longman.
- Li, Shuangling (2015) A corpus-based study of the high frequency nouns *time* and *thing*: Investigating the role of phraseology in the construction of meaning in discourse. Doctoral dissertation, University of Birmingham.
- Lindstromberg, Seth (2010) *English prepositions explained. Revised edition*. Amsterdam: John Benjamins.
- 松坂ヒロシ (1986) 『英語音声学入門』東京：研究社出版。
- Pinker, Steven (2014) *The sense of style: The thinking person's guide to writing in the 21st century*. New York: Viking. London: Penguin.
- Salmon, William (2015) Conversational implicatures, reference point constructions, and *that noun thing*.

Linguistics 53(3): 443-477.

Schibsbye, Knud (1969) *A modern English grammar*, 2nd edn. Oxford: Oxford University Press.

Taylor, John R. (2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press.

綿貫陽・ピーターセン, マーク 『表現のための実践ロイヤル英文法』 東京: 旺文社.

The English *About* and the Japanese *Ni-tsuite*

Shinya Hirasawa

sh.hirasawa.el@gmail.com

Keywords: *about*, *ni-tsuite*, preposition, topic, content, nominalization

Abstract

The English preposition *about* is often used with expressions associated with the concept of thought or utterance (e.g. *think about ...*, *ideas about ...*, *talk about ...*, *the statement about ...*). Its complement is either (i) a noun phrase referring to the TOPIC of the thought/utterance or (ii) a nominalization of (an informative part of) the sentential thought/utterance that the speaker expects the hearer to reconstruct. In the latter usage, the nominalized element sometimes corresponds to the TOPIC of the sentential thought/utterance—but not invariably so. It often corresponds to the CONTENT or some other part or facet of the sentence. Take for example: *Forget what I said about you being smart* ('I said you were smart, but forget it'). *You being smart* is a nominalization of the sentence *You're smart*, which is precisely what the speaker said in the past. Here, *about* is being used to introduce the CONTENT, rather than the TOPIC, of his/her utterance.

The Japanese equivalents for the English *about* in formal and informal style seem to be *ni-tsuite* and *no-hanashi-o/no-koto-o* respectively, as long as the complement corresponds to the TOPIC of the thought/utterance. But in other cases these translations do not work. The conclusion has to be that there is no foolproof way to translate *about* into Japanese.

(ひらさわ・しんや 東京大学非常勤講師)